

国立民族学博物館教授

庄司 博史

世界の言語の歴史や変化について議論する第20回国際歴史言語学会が25～30日、大阪府吹田市の国立民族学博物館で開催される。アジアでの開催は初めて。今、言語の世界や研究方法に何が起きているのか。4人の学者がレポートする。

世界中のことを網羅したデータベース『エスノログ』によれば、現在世界には約7000ものことばがあるという。約200ある国家の中で、これらすべてのことばが同様の規模や地位をもって使われているわけではない。国語や公用語として日常生活のあらゆる場面で使用され、文学から科学までカバーできる言語もあれば、文字もなく数百人の話者によって支えられていることばまでその差は大きい。

現在、これら弱小言語の多くが危機にさらされているという。アラスカ先住民言語の研究でM・クラウスは1992年、国際学術雑誌『言語』で21世紀末までに9割の言語は消滅すると予想しおおきな反響を呼んだ。その要因として、大言語が弱小言語の領域を侵略し、継承者を吸収することで、それらを死滅に追いやっているといる。中でも英語は今日、グローバル化

外国人が集住する地域では日英中韓の4言語表記が珍しくない。多くはごみ捨て、放置自転車、路上喫煙の禁止など注意を喚起する内容だ—東京都新宿区で筆者撮影



「支配者」英語 自らも多様化

の波に乗り、事実上世界の経済や学術活動を支配しつつある。日本でも小学校の英語教育は目前にせまり、企業のなかには英語を社内公用語と宣言し、社員採用や昇進に英語能力を要求するところまであらわれた。

このような大言語の台頭に対して、話者の言語的人権や人類の言語的多様性重視の観点から弱小言語を擁護しようとする運動ももちろん少なくない。特に言語的多様性は生物の多様性と重ねられ、その消滅は人類を取

り巻く環境の危機として論議が続けられている。

とはいえ、世界は大言語による一方的な支配にのみ向かうのだろうか。単一言語社会といわれた日本では今日、長野県の人口に匹敵する213万人の外国人が定住し、彼らが持ち込んだ中国語、韓国語、ポルトガル語などの外国語と日常的に商店や交通機関、職場などあらゆる場面で接触するようになった。また留学、旅行、語学学校の隆盛により、国民がさまざまな言語

に接し学ぶ機会も飛躍的に増大した。日本人の語学べたは有名だが、今ほど多様なことばの語学力が日本人の間に普及したことはおそらくない。これは世界的な傾向で、活発化するインターネットなどの情報活動や人の移動を通じ、世界中をさまざまな言語が飛び交い、それらの語学力も拡散しつつある。英語の

本家イギリスやアメリカもその例外ではない。

一方で、言語が拡散し、他言語と接触しあうことで、変種が生まれている。インド英語、マレーシア英語がその例だ。注目されるのは、これら各地の英語が標準から逸脱した崩れた英語とは必ずしもみなされなくなってきたことだ。一部の英語のみが権



しょうじ・ひろし 1949年生まれ。関西外国語大学大学院外国語研究科修士課程修了。80年に国立民族学博物館助手、99年から教授。専攻は言語学、言語政策論。近年は移民がもたらした多言語状況などを研究。共編著に『事典 日本多言語社会』『日本の言語景観』など。

第20回国際歴史言語学会のうち国際ワークショップ「手話の歴史言語学—データベースの構築と一般歴史言語学における展開を目指して」(28日)、国際シンポジウム「アジア・太平洋地域諸言語の歴史研究の方法—日本語の起源は解明できるのか」(30日)は一般公開。無料。申し込み必要。詳しくは (<http://www.minpaku.ac.jp/research/pr/20110725-30.html>)。

威をもつのではなく、オーストラリアやインド出身者が自分たちの英語を堂々とはなし、新たな英語として認知されている。世界に広まった英語は自らも多様化しはじめている。

かつて日本は標準語によって方言という多様性を一掃しようとしたばかりでなく、国民の異言語との接触を軽視し、日本語という自国語の世界に閉じ込めてきた。英語で世界が統一されると信じ、社会全体が英語一辺倒に安易になびくことは、今日我々が多様な言語との接触でせっかくなにかみかけている、より豊かな言語表現の可能性を閉ざすことになるのではないだろうか。